研究ノート

士別市に見られる山林用厚刃物鍛冶職人～長運斎/長運斉について～

中村　圭佑[1)]
1) 士別市立博物館

はじめに

明治時代から現在にいたるまでの北海道の産業の1つに林業が挙げられる。道内各地で伐木が行われ、家屋用の木材や製紙用の木材などに利用された。

現在では、伐木の際にはチェーンソーや大型機械などが使用されているが、機械化が進む以前は、サッテ[1]や刃広[2]といった斧や鉞などの山林用厚刃物[3]が欠かせなかった。

そして、その山林用厚刃物の製作で、大正から昭和にかけて北海道で活躍した鍛冶職人の集団に「長運斎/長運斉」（以下「長運斎」）という一門がいる。

この北海道の長運斎については、山木雄三、紺谷憲夫の研究が詳しい。山木によると北海道の山林用厚刃物は土佐鍛冶の影響を強く受けてきたとし、中でも「高知市の秦泉寺にはそれぞれ、長運斉、長寿斉、光運斉（斧銘）などと名乗る刃物鍛冶集団がいたが、北海道において斧や鉞などの山林用厚刃物中心に製造し、北海道の山林用厚刃物を中心に製造し、北海道の山林用厚刃物鍛冶の代表的な存在となったのが長運斉であった」と述べている[4]。

また紺谷は北海道で活躍した長運斎について「特筆すべき」こととして「土佐長運斎の本流が大正期に北海道へ移住し、技術修得の修行に四国から上川町へ徒弟奉公するものが何人もいた」と言及している[5]。

つまり、本流の技術が土佐から北海道へ移り、そこに土佐の職人が北海道へ訪れ弟子入りするという状況が存在した。長寿斎や光運斎といった職人が同郷の高知市秦泉寺にいたのにも関わらず、北海道まで弟子入りするところを考えると、それほどまでに長運斎の技術が高かったことがうかがえ、「北海道の山林用厚刃物の鍛冶の代表的な存在」であったというのも首肯できる。

そうした山林用厚刃物鍛冶の代表的だった長運斎を含め、製作された山林用厚刃物の多くには、製作者の銘や屋号、製作地などが刃物の側面に刻印されている。「長運斎」は、「晴光」、「明光」、「益光」、「貞光」など、通字として「光」の字を銘に用いる者が多く、さらに、銘を刻印する際には細長い文字で刻まれているものが多いといった特徴がある。

こうした特徴を踏まえ、士別市立博物館ならびに士別市朝日町郷土資料室の長運斎作の山林用厚刃物の収蔵状況を確認したところ、両施設で複数の収蔵を確認できた【表１】。

その中で、士別市立博物館で収蔵していたハビロの片面に「善光」、もう一方の面には「上士別　㊤　善光　保険」と刻まれているものがみられた【写真１】。

こうした刃物には製作者の銘以外に、製作地や鍛冶場の屋号などを入れることが多い。ハビロにある「上士別」は士別市の東方約 20 キロに位置する士別市上士別町のことを指し、「善光」はハビロの制作者を指している。「保険」については判然としないが、「保険」という言葉から推測するに、作られた製品の質を約束する意味合いではないかと思われる。

少なくともここから得られる情報は、「上士別」に「善光」という鍛冶職人が存在したということであるが、これまでの先行研究では、上士別にそうした鍛冶職人が存在したことは言及しておらず判然としない。

また、高知から北海道に渡道した弟子たちがどのようにして開業地を選定し、その後の活躍につながっていくのかというに点ついても不明な点が多い。

そこで、本稿ではこれまでの先行研究を踏まえつつ、道内で開業していった「長運斎」がどのようなに新たな地で開業に至ったのか、また上士別でみられた「善光」という職人について、検討を行うことで北海道長運斎について改めて整理を行っていく。

1.　長運斎の移住と北海道開業

これまでの先行研究では、長運斎という職人集団が北海道に移住して販路を拡大していったという点やその技術の高さなどに焦点が当てられ、長運斎は「北海道の山林用厚刃物の鍛冶の代表的な存在」と言及されることがほとんどである。この点については長運斎のその技術力の高さを知る上で、重要であるが、しかし、どのようにして道内での開業地を選定したのかなど、活躍に至る以前については不明な点が多い。

そこで本章では、長運斎が「代表的な存在」となる以前の動向を調査し、如何にして道内での開業地を選定したのか把握することで、改めて長運斎という職人集団について整理・検討していく。

先述の通り、長運斎とは高知市秦泉寺で山林用厚刃物を製造していたグループであり、大正期から昭和初期にかけて北海道へ移住し、多くの厚刃物を製造したことで、北海道の山林用厚刃物を製造するグループとして代表的な存在となった。

山木によると、長運斎という銘を使用し始めたのは土佐の元刀鍛冶職人であった山本順蔵（長運斎行光）であり[6]、これについては、香月節子が山本の弟子筋にあたる斎藤氏へ聞き取りをした内容でも同じ話が見てとれる[7]。

ただし、香月によれば、山林用厚刃物鍛冶の元祖は山本の弟子である都築斧助（長運斎國光）であるとされている[8]。これは都築の代で本格的な厚刃物鍛冶職人として発展していったためである。

その後、都築の弟子である門田益穂（長運子盛国）が北海道に移住し、さらにその弟子たちが、大正初期から昭和初期かけて北海道に移住し道内各地で工場を構えていく[9]【図１】。

【図 1】をみると、弟子たちは師や他の長運斎の鍛冶職人と工場が同じ地域で重ならないように開業していることがわかる。長運斎同士での競合を避けるためにそれぞれ異なる場所で開業したものと考えられる。

さらに道内で開業した者たちを細かくみていくと、大正期に移住してきた弟子たちは、留辺蘂、生田原、遠軽などの北見周辺に集中していることがわかる。

『新北海道史』によれば「明治末より大正中期にかけての北海道材の中心は、その主産地名から「北見材」といわれる蝦夷松や椴松の中丸太材に移りつつあった」[10]とされており、北見周辺が木材の主産地であった。このことを考えると、北見周辺において伐木・製材のための山林用厚刃物の重要が大きく、その結果、北見周辺での開業につながっていったものと思われる。

では、どのようにして「北見材」などの情報を入手し、北見周辺への移住を決断したのか。このことについて、2 つの理由が考えられる。

1 点目は、門田とその弟子が先に北海道に来ていたという点である。これによって当時の北海道の林業にかかわる情報が、比較的、得やすかった可能性が高い。

2 点目は、高知市内で北海道林業について詳しい人物が周辺の鍛冶職人の中にいたという点である。秦泉寺から遠くない土佐山田では、刃物生産地としての草創期に、鍛冶屋の親方自身が県外を歩き販路を拡大しており、中には明治 18 年（1885）生の鋸鍛冶職人で 70 歳までに 13 回北海道に訪れた人物もいたとされ[11]、北海道林業に関する情報を、刃物生産地の中で得やすい環境であったことがうかがえる。

つまり、北海道林業にかかわる情報は、高知の内外問わずに収集しやすい環境にあったと考えられる。

また、高知から北海道への移住という点で考えた時に、明治から大正にかけて高知県を含め四国からの移住者は多く存在し、特に明治 30 年（1897）には高知市で結成された北光社[12]と呼ばれるキリスト教系の団体が北見に入地している。

この点については推測の域を出ないが、同郷の人間が林業の盛んだった北見に多くいたことで、心理的に移住しやすい環境が整っていたように思われる。実際、明治以降の北海道「開拓」について、同郷の人間がいる場所に移住する事例は珍しくない。

つまり、北海道林業にかかわる情報や移住先の環境どちらを考えても、長運斎一門にとって移住しやすい環境が整っていたと考えられる。

しかし、大正 8 年（1919）に虫害による木材への被害や輸入量の増加により「北見材」の需要は低下し、大正 10 年（1921）を最後に市場における「北見材」は終わりをみせ[13]、これ以降、降開業地について北見周辺から変化をみせはじめる。

この「北見材」の需要が低下したことが原因となったか、昭和以降の北海道での長運斎の開業地は、遠別、幌加内、士別、深川、当別、日高など、北見から離れた地域でもみられるようになる。なかでも、現在の上川、空知周辺での開業が多くみられたが、その理由については詳らかではない。ただし、いずれの開業地についても各市町村史等で確認すると、パルプ材や建築資材などで使用される木材が切り出されており、林業が主たる産業の 1 つであった。そのため、林業とは別にその土地を選ぶ理由が存在した可能性も考えられるが、現状では明らかにはできなかった。

ここまで道内で開業した長運斎について整理してきた。長運斎が開業した地域など確認していくと、北海道林業の主産地とのリンクがみられた。北海道は造林や伐木に使用するための斧や鉞などの厚刃物の需要が大きく、そこに可能性を見出して長運斎の集団が土佐から北海道に移住してきたことを考えると、林業の主産地周辺で開業することは当然の選択

だったといえる。

そして、「北見材」の需要が低下したのちは、道内各地での開業が見られる様になっていくわけであるが、上川、空知管内での開業が多くみられた理由については明らかにできなかった。開業した場所のいずれも、林業が町の主たる産業の１つだったことは確かであることから、林業以外にその土地を選ぶ理由が存在した可能性がある。しかしそのほかの理由については現段階では判然としないため今後の課題としたい。

2.　上士別の長運斎善光について

本章では上士別でみられた「長運斎善光」について整理していく。先述したとおり、この長運斎善光は、士別市立博物館の収蔵のハビロに「善光」の銘が刻まれていたことをきっかけに存在が判明した鍛冶職人であるが、これまでの先行研究では上士別に長運斎が開業していたということについては確認されていない。

この「善光」について、改めて調査したところ、現在、上士別で営業しているカミイエ農機具製作所の前身である「土佐打刃物製作所」の職人であり、カミイエ農機具製作所の現社長の祖父にあたる上家由視氏が「長運斎善光」として山林用厚刃物の製作を行っていたことがわかった【写真 2】、【写真 3】。

【写真 2】の看板には「土佐打刃物製作所　國光流長運斎善光工場」とある。これは「土佐打刃物製作所」として山林用厚刃物を製作していた工場（昭和 7 年開業）に掲げていた看板らしく、看板の名称からも長運斎善光の工場であることが分かる。

【写真 3】の看板には「農林水産省指定工場　㊤上家農機具製作所」と記されている。戦後、「土佐打刃物製作所」は、山林用厚刃物から農機具の製作に業務内容を変えており、この看板は農機具製作を行っていた時に掲げていた看板だという。

これら看板は現カミイエ農機具製作所の倉庫に保管されていた看板で、「上家農機具製作所」の時代には「土佐打刃物製作所」の看板も共に掲げて仕事をしていたという。ただし、上家氏の記憶では、農機具製作以降、サッテやハビロなどの山林用厚刃物を製作していた記憶はないとのことであった。

では、上家由視は如何にして「長運斎善光」として上士別で「土佐打刃物製作所」の開業に至ったのか。

聞き取りによれば、上家氏のルーツは奈良県の十津川村であり、大正 2 年（1913）に上士別村に移住している。由視氏は大正 12 年（1923）の 13 歳の時に生田原にいた叔父の紹介で、生田原の土佐打刃物鍛冶職人の所に 7 年間の弟子入りをしていたという。そのことを示すようにカミイエ農機具製作所の工場には【写真 4】が飾られている。

【写真 4】は額に入れられた証書（左）と男性 2 名が写った写真（右）である。この額の左の証書について確認していきたい【資料 1 】。

【資料 1】の証明書をみていくと「右者國光流長運斎明光打刃物鍛工場ノ技術修得シタルコトヲ證ス」と記されており、日付は「昭和五年貳月七日」、差出人は「師匠長運斎西村明光」で宛名は「上家由視」となっている。

つまりこの証明書は、「師匠長運斎西村明光」が「上家由視」に対して、昭和 5 年（1930）に「長運斎明光打刃物」の技術を修得した事を証明したものであり、このことから由視氏が弟子入りしたのは「長運斎西村明光」であったことがわかる。この「長運斎西村明光」とは、門田の弟子で生田原で開業していた西村彦治である[14]。

ただし、この証明書の住所が「釧路市」となっているが、由視氏の弟子入り後、西村は工場を生田原から釧路へ移転しており、その際に由視氏も共に釧路へ移っている。弟子入り時と証明書発行時の住所が異なっているのはこのためである。

そして、釧路での修行を終えた由視氏について、昭和 7 年（1932）に上士別で「長運斎善光」として「土佐打刃物製作所」を開業する。上士別（朝日町を含む）は大正から昭和にかけて、関東大震災による復興用材、戦時中の伐り出し、林産工業などが盛んな地域であり、山林用厚刃物の需要は大きかった。林産工業が盛んな地域であったこと、由視氏の出身地であったことから、上士別での開業に至ったものと思われる。

そして戦後になると「土佐打刃物製作所」は「上家農機具製作所」として製造品を変化させていくのだが、その背景には、いわゆる「戦後開拓」影響がしているものと思われる。戦後日本は緊急で土地の「開拓」を推し進めていった。このことについて『新北海道史』では「膨大な飢餓人口・失業人口に当面の食と行き先を与えようとしたものであった」[15]としている。その結果、広大な土地のあった北海道に多くの人々が移住し、土地の「開拓」が進められていった。

このような状況にあって、農機具の需要も高まり、由視氏は農機具製作に力をいれていった。その結果、

製作した上家式プラウや上家式カルチベーターといった畜力用農機は全国農業機械化大博覧会において最高位入賞するまでとなっていった【資料2】。

こうした入賞には山林用厚刃物職人としての技術力の高さがあったからではないだろうか。いわゆる「戦後開拓」が進められ、荒廃地や木の根が残るような土地を開墾する必要な状況となっていった。そうした状況下で、需要に応えるべく山林用厚刃物から農機具の製作に変えていった。元来、長運斎として山林用厚刃物を製作していた由視氏の農機具は性能が高かく、その結果こうした博覧会での入賞などにつながったものと思われる。

以上、上士別にみられた長運斎について確認してきた。上士別でみられた「長運斎善光」は、現カミイエ農機具製作所の前身である「士佐打刃物鉄工所」の山林用厚刃物の鍛冶職人であることが分かった。

釧路の長運斎明光に弟子入りし、弟子入りを終えると上士別で自身の士佐打刃物工場を開き、のちに農機具製作でその技術を如何なく発揮した。

ほかの山林用厚刃物鍛冶職人の事例も検討する必要があるが、こうした成果をのこしていった理由の1つには、長運斎としての山林用厚刃物鍛冶の高い技術を持っていたことが、農機具製作所への転身後の活躍にも影響していたものと思われる。

おわりに

ここまで、長運斎の移住と北海道での開業状況についてまとめてきた。北海道長運斎の開業地は林業が盛んであった地域とのリンクがみられ、特に大正期について北見周辺で採れた「北見材」が大きな生産地であったことから、北見周辺で開業が多くみられた。

そして、大正末期に「北見材」が衰退していくと、道内各地での開業が増え、中でも上川、空知周辺で開業するものが多くみられた。この開業地について、林業が主たる産業となっている地域であることは当然であるが、一方で上川や空知周辺で開業が多くみられるようになったことについては不明な点が多い。林業以外のほかの理由があったのか、もしくは林業について特筆するような理由があったのか、この点については今後の課題としたい。

また、士別市立博物館でみられた「長運斎善光」について、「上家由視」という人物が釧路の西村彦治（長運斎明光）に弟子入りし、のちに上士別で開業して山林用厚刃物の製作を行っていたことが改めて判明した。

戦後になると農機具製作所に転身し、「上家式農機具」として全道に名を馳せるようになっていった。こうした活躍には山林用厚刃物鍛冶職人としての技術が大きく影響していたと考えられる。

今回は「長運斎善光」での考察にとどまったが、同様に、ほかの長運斎やほかの厚刃物鍛冶職人のその後を検討することで、明治から機械化が導入され始める昭和30年代までの北海道林業において、欠かすことのできなかった山林用厚刃物産業の盛衰を明らかにできると思われる。これについても今後の課題としたい。

以上が長運斎の移住と北海道での開業状況についてであり、最後にこれまで新たに判明した内容を反映した、長運斎の系譜と開業地の図をあげておく【図2】[16]、【図3】。

末筆になるが、今回の調査にあたって聞き取り調査等に快く協力いただいた上家栄二氏（カミイエ農機具製作所3代目）、上家二三夫氏（上家由視氏ご子息）、また、調査に同行いただいた士別市立博物館特別学芸員廣田健二氏には、改めて感謝申し上げたい。

---

[1] 北海道開拓記念館監修『北海道の民具』（北海道新聞社 1993）126頁。これによると北海道の代表的な斧としてサッテを挙げ、「伐木作業で受け口伐りや杣角造材の粗削りに使用された」とし、「形は全体的に長大で、本州の斧に比べると著しく大きい」と説明している。

[2] 前掲注1北海道開拓記念館監修図書　126頁。これによると「刃広は鉞の一種で丸太を四角に削る杣角造材作業で使用された」と説明している。

[3] 山林用厚刃物とは、斧や鉞、鉈などの厚手の刃物ことを指し、そうした刃物を製作していた職人を厚刃物鍛冶と呼ぶ。

[4] 山木雄三「北海道における鍛冶技術（3）-林業用斧の制作技術について-」（北海道開拓記念館編『北海道開拓記念館調査報告』第32号　北海道開拓記念館　1997）

[5]北の生活文庫企画編集会議編-紺谷憲夫執筆担当「鍬・サッテと鍛冶職人-在来鍛冶技術とその伝承-」（『北海道の民具と職人』北海道　1996）76頁。

[6] 前掲注4山木論文　11頁。

[7] 香月節子、香月洋一郎『むらの鍛冶屋』（平凡社　1986）46頁。

[8] 前掲注7香月(節)、香月(洋)著書　46頁。

[9] 前掲注3山木論文によると、北海道に移住した最初の人物を山崎金吾（長運斎金光）としている。しかし、香月節子『鉄と火と水の技』（慶友社　2015）によると門田益穂（長運子盛国）が弟子を伴って、最初に北海道に移住したとしている。両者に食い違いがあるが、山崎が単独で移住したとするより、当時新たな販路を拡大するために門田が弟子を伴い移住したとすることの方が、当時の長運斎の状況からすると自然である。したがって、ここでは香月の論にしたがって検討を進めていく。

[10] 北海道『新北海道史』第4巻　通説3（北海道　1973）

976 頁。

[11] 香月節子『鉄と火と水の技』（慶友社　2015）78 頁

[12]北光社と長運斎はいずれも高知市内で活動している。また、北光社が北海道へ出航した場所と長運斎が刃物を製作していた秦泉寺は、直線で 3 ㎞程度と比較的近い位置関係にあったことから、地域を介して互いに認識していた可能性は高い。

[13] 北海道『新北海道史』第 5 巻　通説四（北海道　1975）358 頁。

[14] ただし、この証明書の住所が「釧路市」となっているが、由視氏の弟子入り後、西村は工場を生田原から釧路へ移転しており、その際に由視氏も共に釧路へ移っている。弟子入り時と証明書発行時の住所が異なっているのはこのためである。この西村の移転については、由視氏の弟子入り時期から、少なくとも大正 12 年（1923）までは生田原で工場を営んでいたことがわかり、こののちに釧路へ移転しているのであるが、大正 8 年（1921）を境に「北見材」が衰退していったことを考えると、影響を受けての釧路移転であった可能性は高い。

[15] 北海道『新北海道史』第 6 巻　通説 5（北海道　1975）260 頁。

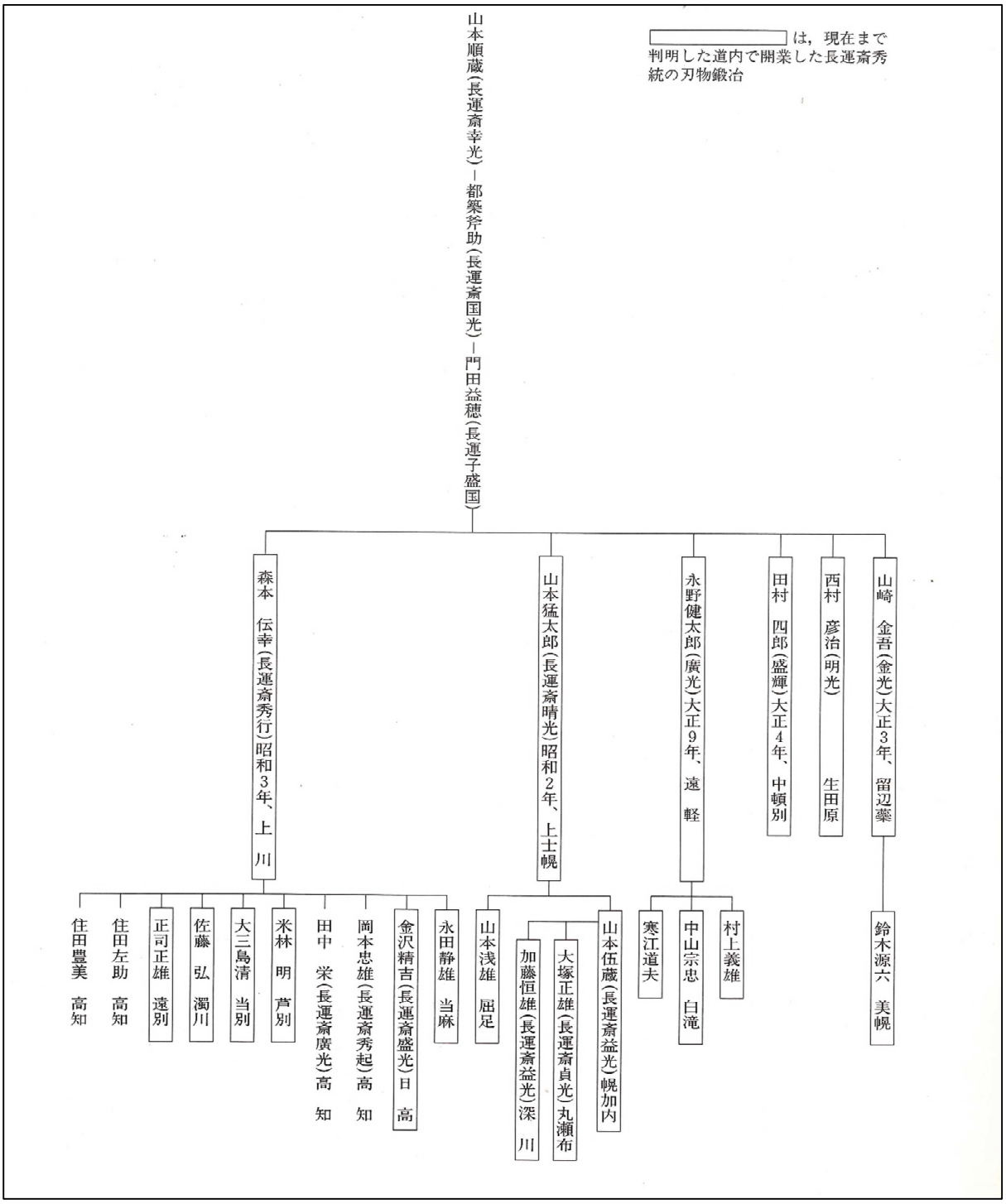
[16] 【図 2】の系譜について、香月は前掲注 11 著書において、山本伍蔵（長運斎益光）を門田益穂（長運子盛国）の弟子として説明している。対して山木は「北海道における鍛冶技術（3）-林業用斧の制作技術について-」において、山本（伍）を山本（猛）から独立したとして説明しており、食い違いがみられる。山本（伍）と山本（猛）は実の兄弟関係であり、山本（猛）が兄である。兄弟の年齢差は不明だが、弟が兄に弟子入りしたとは考えにくく、互いに門田に弟子入りしていたと考える方が師弟関係としては自然な形である。したがって、系譜についても香月の論にしたがい、図の作成を行った。

【参考資料編】

種類	銘	屋号	製作地	大きさ		備考	備考
				たて（刃長）㎝	よこ	登録番号	備考1
サッテ	長運齋照光	○に山（マルヤマ）	十勝国上川郡新得町屈足市街	12.0	40.5	AB1403321	朝日町郷土資料室所蔵
サッテ	長栄齋廣光	○に栄（マルエイ）	－	12.5	42.0	AB1404538	朝日町郷土資料室所蔵
サッテ	長運子鬼神	－	－	10.5	41.0	AB14-00157	朝日町郷土資料室所蔵
サッテ	善光	－	－	11.0	39.5	AB1404360	朝日町郷土資料室所蔵
サッテ	照光	○に山（マルヤマ）	十勝国上川郡新得町屈足市街	12.0	36.5	AB1405438	朝日町郷土資料室所蔵
サッテ	照光	○に山（マルヤマ）	十勝国上川郡新得町屈足市街	11.5	35.5	AB1403321	朝日町郷土資料室所蔵
ハビロ	國光	－	土佐	13.0	15.5	AB1401251	朝日町郷土資料室所蔵
ハビロ	善光	○に上（マルウエ）	上士別	18.0	20.0	13865	士別市立博物館所蔵
鉈	善光	○に上（マルウエ）	上士別	20.2	4.5	13866	士別市立博物館所蔵

【表 1】「士別市立博物館および朝日町郷土資料室所蔵の長運斎製作の山林用刃物一覧」

【写真 1】「善光」の銘が刻まれたハビロ（士別市立博物館所蔵）

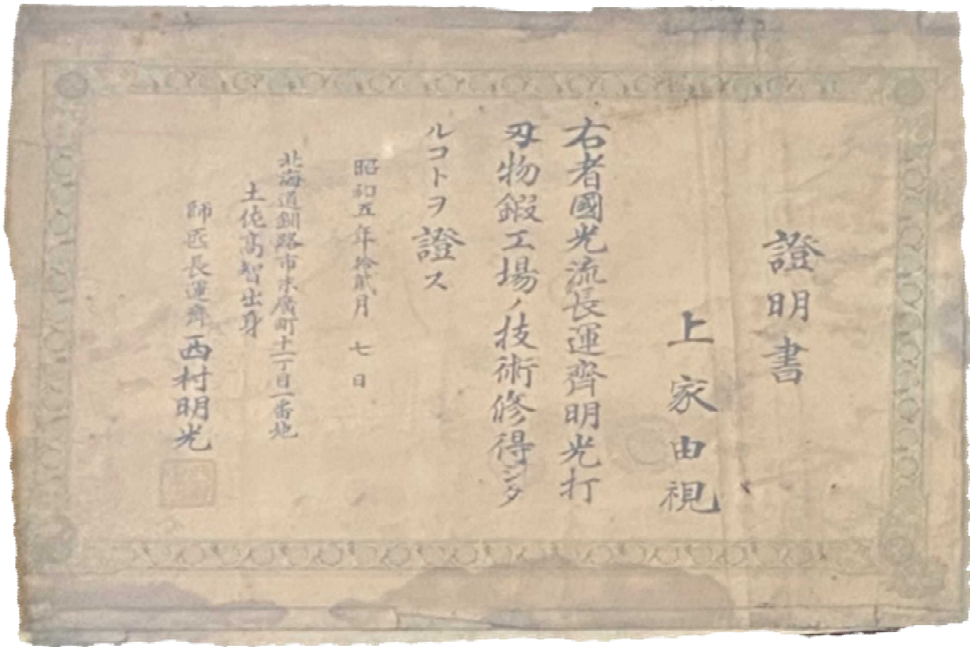


【図 1】「林業用刃物鍛冶の系譜」（山木雄三「北海道における鍛冶技術（3）-林業用斧の制作技術について-」）より引用

【写真 2】左「土佐打ち刃物製作所看板」（士別市立博物館所蔵）

【写真 3】右「上家農機具製作所看板」（士別市立博物館所蔵）

【写真 4】「カミイエ農機具製作所で掲げている額」（カミイエ農機具製作所所有）



證明書

上家由視

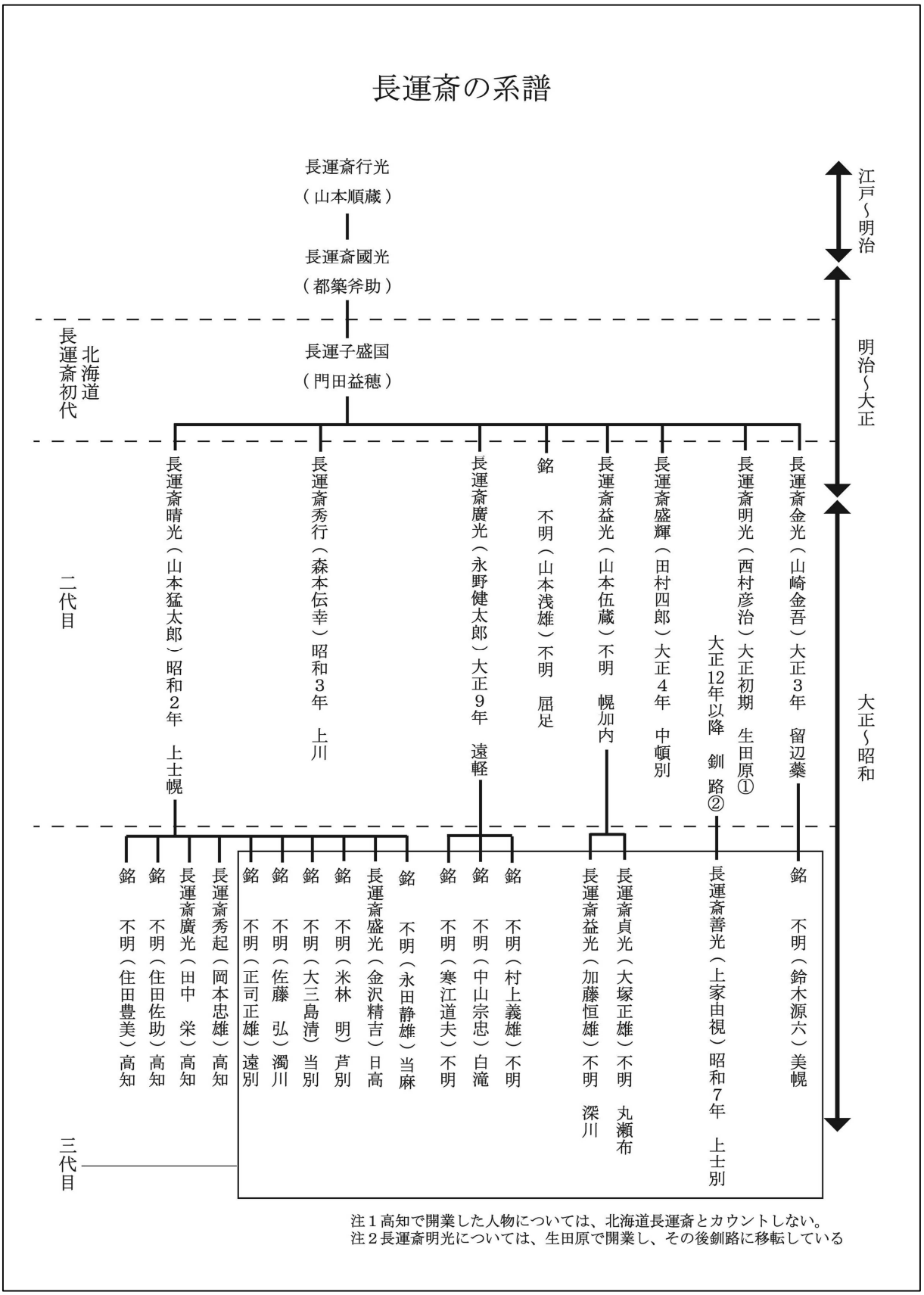
右者國光流長運齊明光打
刃物鍛工場ノ技術修得シタ
ルコトヲ證ス

昭和五年拾貳月　七日

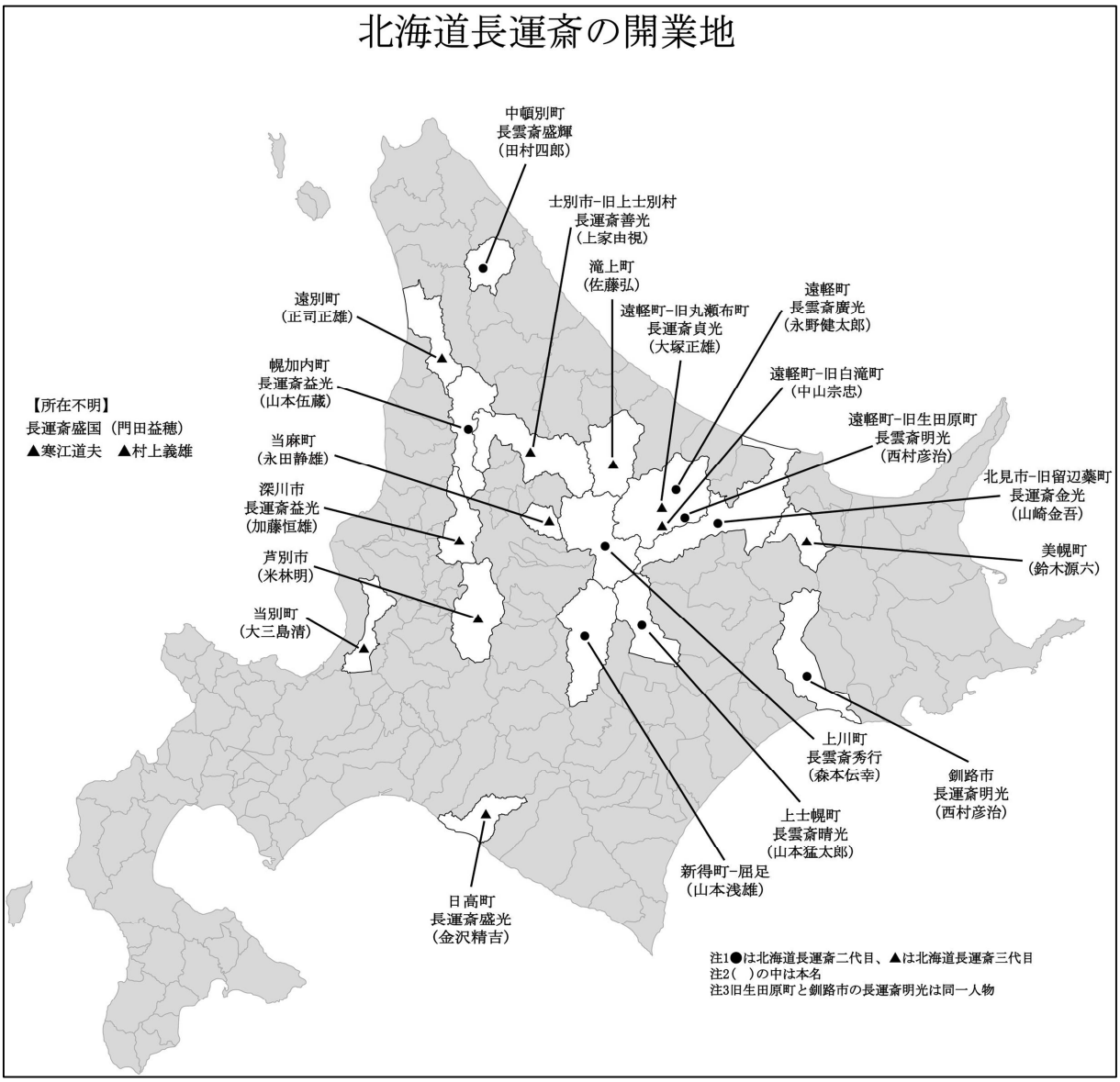
北海道釧路市末廣町十二丁目一番地
土佐高智出身
師匠長運齊　西村明光

【資料１】「證明書」（カミイエ農機製作所所有）

【資料 2】「全国農業機械化大博覧会入賞を掲げたチラシ」（士別市立博物館所蔵）



【図 2】「道内長運斎の系譜について」（山木雄三「北海道における鍛冶技術（3）-林業用斧の制作技術について-」、香月節子『鉄と火と水の技』）を元に、筆者が改めて調査した内容を反映して作成。



【図 3】「北海道長運斎の開業地」（【図 2】を元に道内で開業した長運斎のみを抜粋し作製）